

# 講演録

## 「有楽町から見えてくる山梨の魅力」

講師

やまなし暮らし支援センター移住相談員  
倉田 貴根 氏

日時：平成28年7月25日(月)

13:45 ~ 14:45

会場：山梨県立図書館2階 多目的ホール

主催：山梨中銀経営コンサルティング(株)

## 山梨には何もない？

本日ここにお招きいただいたことを感謝しております。3年間にわたる有楽町のやまなし暮らし支援センターでの仕事を通じて経験した山梨県の魅力、皆さんが気づいていない山梨の良さをお話ししたいと思います。

皆さんは「山梨なんて」という言葉をよく耳にしませんか。有楽町で仕事をしていると、山梨の人がそのように言うのをよく耳にします。そして、その次には「なーんにもないじゃん」という言葉が続きます。山梨の市町村をPRするイベントで、ある自治体の職員の方が「私たちの市は不便で何もないんです」と紹介していました。このままでいいのでしょうか。地方創生が叫ばれる中、有楽町のふるさと回帰支援センターには現在43県の情報が集まっており、それぞれ競い合っています。その中で「山梨はこんなに素晴らしいところなんです」とPRしていくことの必要性を感じています。

面白いデータがあります。これは外部評価と内部評価の高さを示した図です。これによると、山梨県は外部評価が高いにもかかわらず、内部評価が低くなっています。外部の人が山梨県を高く評価している一方、山梨県民はあまり評価していないということです。逆に福島県や沖縄県は外部評価よりも内部評価の方が高くなっています。このデータを見ても分かるように、山梨県民はもっと自分の県に対して自信を持ってよいのではないかと思うのです。

## 移住先としての山梨県の人気の高さ

私は平成25年6月のセンターオープンと

同時に移住専門相談員になりました。6月1日のオープン日の朝、入り口で待っているお客さまがいました。山梨県の移住相談窓口ができることを聞き「待っていました」と言わんばかりに来てくださったのです。平成25年度の山梨への移住相談件数は、6月から翌年3月までの10か月で1,740件に上りました。翌年度は2,075件、その翌年度は2,445件と、山梨への移住を希望する人は年々増加しています。実際に移住した人も、初年度が52名、翌年度が199名、その翌年度が210名と増加しています。やまなし暮らし支援センターが入っているNPO法人ふるさと回帰支援センターは14年前から首都圏の人々の地方への移住を促進する活動をしています。平成25年度に山梨がこのNPOに窓口を設置したとき、相談員を置いていたのは、岡山、福島、山梨の3県でした。翌年の平成26年度に広島と青森が追加となりましたが、それでも5県のみでした。つまり、山梨県は他の県が本格的に移住促進に取り組む以前から窓口を設置していたということになります。翌平成27年度になると、29県1市の相談員が配置されました。1市というのは静岡市です。同市は市単独で有楽町に相談窓口を設置しました。そして、現在の状況ですが、ふるさと回帰支援センターには、北海道、東京、愛知、大阪を除くすべての県の情報が集まっています。相談員を配置している県も34あります。センターに来た人は、ほぼ全国の情報を入手できる状態となっているのです。

このように、非常に競争が激しくなっているわけですが、その中であって、山梨県の人気は非常に高いです。そのことを皆さんに知って欲しいと思います。移住希望地

ランキングを見ますと、平成 24 年に山梨県は 15 位でした。しかし、山梨県の相談窓口が設置された平成 25 年に一気に 2 位にまで浮上しました。当時、窓口には移住希望者がたくさん訪れました。しかし、私は山梨の情報を知りませんでした。そのため、移住希望者に山梨の何を PR すればよいのか、誰を紹介すればよいのか分かりませんでした。移住相談に来るお客さまの顔を見ながら、私は山梨県内の情報をさらに収集して、お客さまに満足していただけるような窓口でありたいと強く思いました。そこで考えました。「これだけお客さまが来てくださるのであれば、きっと移住相談件数全国 1 位になれる」。そのように考えたのが平成 26 年でした。同年は安倍総理大臣が石破地方創生大臣を任命するなど、地方移住の元年と言われた年でした。この年に移住希望ランキング 1 位を取れば全国が山梨に注目するだろうと考えました。同時に、山梨県民も山梨人気の高さに気づいてくれるのではないかと思ったのです。ですから、その 1 年間は必死に取り組みました。山梨県のデータを一生懸命入手しました。そして平成 26 年の移住希望ランキングで山梨県は 1 位になったのです。しかし実は 2 位の長野県とは非常に僅差でした。しかし、わずかな差であっても、地方移住元年である年に 1 位を取ることは非常に重要な意味がありました。案の定、1 位となったことにより、多くの山梨県民がやまなし暮らし支援センターの存在を知り、同時に、山梨県内から様々な情報が集まってくるようになりました。翌年は、長野県に 1 位を譲りました。しかし、そのときは山梨の人気の強さを十分に確信していたので、順位にはそれ

ほどこだわらなくてもよいと感じていました。

このように山梨県は外部からの人気が高いわけですが、その一方で受け入れ態勢が十分にできているかという点については、若干の不安を覚えています。だからこそ、今日の講演会を通じて、皆さんに山梨の魅力に気づいていただきたいと思ったのです。

## 他県の取り組み状況

ランキング上位県について触れたいと思います。1 位の長野県は市町村が移住セミナーやツアーを独自で企画するなど、非常に力があります。銀座に、「銀座 NAGANO」という施設があります。これは、アンテナショップではなく長野県のファンづくりを目的としたものです。このように、長野県はもともと熱心に取り組んでおり、力のある県です。長野以外で、最近注目すべき県があります。それが、広島県と島根県です。広島県は移住のターゲットを明確に絞った取り組みをしています。ターゲットとしているのは若い女性です。ポスターやセミナーにも明確にその姿勢が見られます。また、島根県は、驚くべきことですが 20 年前から移住促進に取り組んでいます。同県は「ふるさと島根定住財団」を設置するなど、受け入れ態勢を確立しています。また、地域で頑張っている人々を支援する制度も充実しています。これまで地道に続けてきた活動の成果が実ってきているのです。それ以外で、注目すべきは静岡県です。海がある静岡県を移住候補地とする首都圏在住者は多いと思います。静岡は県としても、市としても相談窓口を設置するなど力を入れています。

## 若者の地元回帰への取り組み

若者の地元回帰を促進している自治体もあります。いくつかの自治体は「法政大学まちづくりチャレンジ入試」の制度を活用しています。具体的には、まちづくりに関心があり、将来そのような分野で活躍したいとの志を持つ高校生を自治体が推薦します。彼らは法政大学で学んだ後に地域に帰り、まちづくりのために働きます。なお、推薦できる自治体は、法政大学がまちづくりで優れた取り組みをしていると認めた自治体のみです。現在指定を受けている自治体は全国で12です。このうち長野県は2つの自治体が指定されています。このように、様々な自治体が移住促進や若者回帰に力を入れています。

## 県外の人から教えられた山梨の魅力

さて、山梨県について考えてみたいと思います。山梨県には本当に「何もない」のでしょうか。多くの方が山梨県は「何もない」、「不便」と言います。しかし、どこと比べてそのように言うのでしょうか。たぶん東京です。どうして東京と比べるのでしょうか。この点については、パネルディスカッションでも面白い意見が出るかも知れません。山梨の魅力について、移住相談をしている中で気づいたいくつかの点をお話しします。まず、水です。ちょうどこの演台に「甲府の水」のペットボトルが置かれています。あるとき、暑い時期に移住相談者が汗をかきながら窓口を訪れたことがありました。そのときに、この「甲府の水」のペットボトルを差し上げました。そのとき、彼らはものすごく感動していました。

一般的に、東京では水道水を飲むのに抵抗があり、飲料水としてミネラルウォーターを購入しています。その彼らに「この水は甲府市の水道水ですよ」とお話ししました。彼らは「ということは、甲府の人はこんなにおいしく、きれいな水でシャワーを浴びているのですか。この水でお風呂に入っているのですか」と言いました。私は目からうろこが落ちる思いでした。私も山梨県出身ですが、のどが渴けば当たり前水道水を飲んでいました。しかし、そのことは東京では当たり前ではないのです。このとき、私は「自分が気づいていない山梨の魅力がまだまだたくさんあるに違いない」と思いました。この例のように、私は相談業務を行う中で、相談者から山梨の魅力を少しずつ教えられていったのです。その一つ一つが現在の相談業務に非常に役に立っています。私たちが身の回りを見たときに、まだまだ気づいていない魅力があると思います。先日、都留市に移住した方から聞いた話ですが、東京にいるときは冷蔵庫にジュースをたくさん入れていたそうです。しかし、都留市に移住してから、冷蔵庫からジュースがなくなりました。水道の水がおいしいからです。その方のお子さんもジュースではなく、お茶が飲みたいと言うようになったそうです。子どもは正直です。山梨の水を一つとっても、これだけ魅力があるわけです。

## 山梨県民が気づいていない魅力とは

私たちの身の回りには、気づいていない魅力が他にもたくさんあります。その一つが、あいさつです。私は現在東京のマンションに住んでいますが、子どもとすれ違った

ときに「おはよう」と声をかけても返事が返ってきません。「知らない人とはお話ししてはいけない」と言われているのでしょうか。一方、山梨に移住した人は「山梨の小学生は人と会うと誰にでもあいさつをする」と言います。山梨では当たり前のことですよ。しかし、東京では当たり前ではないのです。東京の満員電車で人とぶつかることがあります。「ごめんなさい」という言葉はありません。山梨はどうでしょうか。ある移住希望の方が山中湖村に行った時の話です。横断歩道を渡ろうとしていた子どもたちがいたので、車を止めました。そのとき、渡り終わった子どもたちが振り返り帽子を脱いでペコリと頭を下げて「ありがとうございました」とお礼を言ったのです。その方は、「山梨はすごいですね」と感激していました。あいさつ一つにしても、山梨には素晴らしい文化が残っています。

他にもあります。それは、「朝起きて」というキーワードです。山梨に移住してきた方が、朝起きたときに、地域の方から「タケノコ掘りにいくよ」と言われたそうです。その移住者は東京から来た方ですが、「えっ、これからタケノコ掘りに行けるんですか（そんなに簡単に?）」と驚いたそうです。このようなことは山梨では日常茶飯事です。朝起きて、天気良ければお弁当を作って山登りに行ける。山菜採りに行ける。そのようなことができるのは、山梨だからです。

このようなこともありました。私が市川三郷町のホテルに宿泊した時のことです。私は朝の4時30分くらいに起こされてしまったのです。何に起こされたと思いますか。鳥の声にです。ホテルの近くに山があったのですが、その山から聞こえてくる鳥の

声に、私は思わず窓を開けてしまいました。それはまるでオーケストラの奏でる音楽を聞いているみたいでした。このような体験ができるのも、山梨だからです。

### 山梨の魅力をリストアップすると…

あるとき、山梨の魅力を思い起こし、リストアップしてみたことがあります。そのとき、たった5分間という短い時間のなかで、以下のことが思い浮かびました。

「大きな富士山の眺め」、「飛び込みができる川遊び」、「桃、ブドウ、すもも、サクランボ」。山梨の人にとって、今の時期、桃は「買う」のではなく「もらう」ものです。東京のスーパーで桃を買うと、1つ300円です。かつ、あまりおいしくありませんでした。

「ワインや日本酒やほうとうや馬刺し」、「各地に散らばる日帰り温泉施設」。温泉について、移住者の方から「山梨には数百円に入ることでできる温泉があちらこちらにありますよね。こんな県はないですよ」とよく言われます。

「安く利用できるゴルフ場やテニス施設」。私はゴルフをしないのですが、転勤で山梨に来ているある方が「山梨は東京よりもずっと安くゴルフができる」と言っていました。

「子どもたちが自由に遊べる公園や河川敷」。私の実家は旧敷島町の荒川の近くですが、荒川の河川敷にはテニスコートが整備されており、自宅から3分歩くだけでテニスを楽しむことができます。東京だと駐車場に入るまでに並び、駐車料金を千円も払い、テニスコートの利用料も払わないとテニスできません。また、近くの公園で子

どもを遊ばせると「うるさい」と怒られます。最近では保育所設置に反対運動が起きていますが、子どもが外で元気に遊ぶのは当たり前前のことです。そのような当たり前前のことが東京ではできないのです。

「むせ返るような緑の香り」。これは、都留市に行ったときに感じたことです。都留市は山と山の間位置しており、とても山が近いのです。そこで、私が感じたのは「ここは、緑の風が吹いている」ということでした。

「肺の奥まで吸い込みたくなるような澄んだ空気」。先日、移住相談に来た方に「山梨のどこがいいのですか」と訊ねました。その方はこう答えました。「山梨には山があつて空があることです」。山梨県民である皆さんは、常にその中にいるので感じなくなっているかも知れませんが、山があつて空があるということ。これは、本当は素晴らしいことなのです。

「3000メートル級の山々の風景」、「まるで『癒しCD』のような鳥たちのさえずり」、「カエルの大合唱やホタルの乱舞」。カエルと言えば、実家の近くに田んぼがありました。水が張られる時期になると、カエルの合唱が始まります。そのときに、子どもたちと一緒に「うるさい」と叫ぶとピタッと鳴き声が止まります。しかし、少しするとカエルの親分が再び鳴き出し、それに連呼するように他のカエルも鳴きはじめます。東京ではそのような体験はできません。

「おせっかいな人々」。この時期、畑でキュウリ、ナス、トマトがたくさん採れます。そうすると、必ず誰かが実家の前に置いて行ってくれます。私はこのことを「お供え物」と呼んでいます。そんな生活がで

きるのも山梨ならではの。

「“おこうこ”とお茶」。10時と3時になると、おばあちゃんが「お茶を飲めし」と言って、てんこ盛りの“おこうこ”を出してくれます。

以上、山梨の魅力を少しだけ挙げてみましたが、すべてに共通するのは「しかも、東京からこんなに近いところで…」ということです。東京からこんなに近いにもかかわらず、こんなに豊かな生活ができるのです。私たちの普通の生活の中に埋もれている宝物に気づいて発信することが大切です。熊本県のある地域に「おんぶもっこ」というおんぶ紐があります。これは、親と子どもが密着し、とても安心感があるのが特徴です。ある母親グループがこれを通信販売で売り始めたところ、大ヒットとなり、現在は入荷待ちの状態です。もともと存在している宝物に気づいて、実際に行動を起こした好事例と言えます。山梨の魅力に気づくことができるのか、できないのか。これが大きな分かれ道となります。山梨に住む私たち自身が山梨の魅力に気づいて発信しなければ、PRすることはできません。

## フェイスブック「倉田が行く」シリーズについて

移住者から「山梨の人って山梨の良さに気づいていないよね」とよく言われます。私は有楽町の窓口に座っているだけでは山梨の良さを伝えることができないと感じました。そこで、実際に自分の足で山梨を歩いて、フェイスブックで発信することにしました。それが「倉田が行く」というシリーズで、今年の4月にスタートしました。この取り組みには、県外への発信とともに、

県内への発信という目的もありました。この取り組みを始めて、面白いことが起こりました。「倉田が行く」シリーズは各自治体の職員に「あなたのまちで、PRできる場所や人のところに倉田を連れて行ってください」とお願いしますが、彼らが私に地域を案内することを通じて、彼ら自身が改めて地域を見直すきっかけになっているのです。ある自治体の職員が「普段見ている風景なのに、倉田さんを隣に乗せているだけで違う風景に見える」と言いました。これは大切なポイントです。自分の地域を人に紹介しようとする、「どこに案内すればいいのかな」、「誰にお会いしてもらえばいいのかな」と考えるようになります。すると、アンテナが立つのです。普段見慣れている地域でも、アンテナを立てることにより、見方が変わってきます。

ところで、「倉田が行く」シリーズを始めるとききっかけとなったのが、山中湖村でゲストハウスを運営している方との出会いです。その方は60歳の定年を機に、山中湖村に移住をなさいました。彼は山中湖村の状況を見たときに、企業の保養所がたくさんあることに気づきました。そして、保養所を借り受けて外国人向けのゲストハウスを始めたのです。そのとき、彼の年齢は72歳でした。その方は「72歳の私にできたのだから、誰でもできる。もし、ゲストハウスを始めたい人がいるのなら、ノウハウをすべて教えるので、案内してもらっていいですよ」とおっしゃいました。このような素敵なお事例をもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。

大月に行ったときの話ですが、大月には橋倉鉦泉という旅館があります。この橋倉

鉦泉のファンの中に、先日お亡くなりになった永六輔さんがいます。永さんは旅番組で語るが多かったのですが、橋倉鉦泉については決してお話をされなかったそうです。自分だけのものにしておきたかったのです。

南アルプス市にある穂見神社にも行きました。櫛形山の中にあるのですが、小さな部落を過ぎてしばらく行くとこの神社があります。道はこの神社で止まっています。周りが山に囲まれていて、この神社がポツンとあるのです。話を聞くと、非常に古い歴史のある神社だそうです。このように、山梨県にはまだ知らない素晴らしい場所がたくさんあります。

「倉田が行く」シリーズのフェイスブックの返信に意外なコメントがありました。「市川三郷エリアは甲府南インターから行ける。甲府昭和まで行くよりも安いので、愛用のエリアです」と東京の方が書いてくださったのです。市川三郷エリアに東京のファンがいるのです。山梨県民の感覚で考えると、とても新鮮な見方だと思いませんか。県外の方の見方はとても参考になります。

大月市の地域おこし協力隊の方は、猿橋にボートを浮かべ、下から猿橋を見たら面白いとおっしゃいました。山梨の方がこのような見方をすることができるのでしょうか。このボートは、大ヒットとなっています。外から見た人によるアイデア、発想の転換を活かした好事例と言えます。このように、外から見た斬新な発想をどんどん取り入れていくといいのではないかと思います。

**山梨を知り、好きになり、自信と誇り**

## を持って発信する

私は「倉田が行く」シリーズで山梨を知ろうとしています。皆さんもそれぞれの方法で山梨を知ることが大切です。山梨を知ると、好きになります。山梨を好きになると、自分の中に自信が生まれます。何でも東京に行けばいいわけではない。山梨にしかないものが、必ずあります。自信が生まれると、次に何が起こるでしょうか。誰かに伝えたくくなります。そして、その地域の役に立ちたくなるのです。皆さんは、このまま山梨の魅力に気づかないままでいいのでしょうか。こんなに素晴らしいものがある山梨。まず、山梨の魅力を知ることが大切です。今日、この講演会場を一步出たときに、皆さんの目に山梨がどのように映るでしょうか。今日、お話を聞いていただいた皆さまは「山梨なんて、なーんにもないじゃん」なんて思わないですよ。

## 移住促進の課題

移住の話に戻ります。移住地を決定するための大切な要素は、「行ったことがあるかどうか」ということです。行ったことのない地に移住をするのは難しいです。その点において、山梨に観光で来た人に「行ってよかった」と思ってもらえることが大切です。行ってよかった観光地が、いつか住みたい場所になります。そのために、住んでいる人々が魅力的な暮らしをしているかどうか、これが重要なポイントになります。同時に、住んでいる人々が地域の魅力を感じているかどうかということも大切です。地域の人々が元気に暮らしていると、元気な人が集まってきます。そのよい例が、富士吉田市の「元気祭り」です。地域おこし協

力隊の方が中心となり、多くの若者を巻き込みながら祭りを行っています。その参加者に静岡県から来た方がいました。どうしてこの祭りに参加したのか訊ねると「面白そうな人々が集まる祭りと聞いて来た」と答えてくれました。つまり、人々が元気に楽しく暮らしている場所には、元気な人が集まってくるということです。

最後に、山梨県が移住促進を行っていくための課題をお話しします。1 点目は、山梨に住む人々が自分の住んでいる地域を知り、自信と誇りを持つことです。そうでないと、PR することができません。2 点目は、受け入れ態勢の構築です。先ほど、財団を作って受け入れ態勢を整えている島根県の例をお話ししました。山梨県においても、県全体を統括するような態勢が整えられればありがたいと思います。3 点目は、地域の協力者同士が結集することです。各地域は、それぞれ頑張っていますが、まだ単発的な動きにとどまっているように思えます。先週は 3 市をまたいだ空き家ツアーが行われました。単独の市ではできないことでも連携すればできることがあります。最後に、愛郷教育の必要性です。東京に行くことだけがすべてではない。山梨の素晴らしさを知って、山梨を好きになって、生まれてくる子どもたちにも山梨の良さを知ってもらうことが大切です。そうしないと、若者が県外に流出してしまいます。講演会での話は以上です。この後、パネルディスカッションがありますので、引き続きご参加いただけたら幸いです。ありがとうございました。